

～「交流」という枠のなかで出会うということ～

町民代表 高橋 理沙

はじめに この派遣に参加させて頂けたことに、まず心より感謝申し上げます。コンコードで出会う方々は本当に皆温かく、どこまでも好意的に私たちを迎えてくださり、これまで交流に携わってきた多くの方々の素晴らしい積み重ねを感じました。出来事一つ一つ丁寧に報告したい気持ちですが、限られた分量の為、特に自身が関わった部分と、全体を通しての感想をもって、ここでの報告とさせて頂きたいと思います。

コンコード町と人々 コンコードと一言に言ってもその中に色々あるのは当然ですが、とにかく町の方々の生活水準に驚きました。お話しする方は、社長や経営者級の方が多く感じ、とにかく文化人、知識人という言葉が似合う方々でした。独立戦争の勃発の地でもあり、思想や哲学においてもその後大きな流れを生んだ地でもあり…そうした歴史上の威厳が、今も町の風情や人の姿勢に息づいているように感じました(そんな皆さんですが、クッキーやお菓子の話をするときは本当に子どものように無邪気なお顔になります！)。



イギリス兵の墓
(ノースブリッジ前の木陰に)

文化交流を通して 今回、私は七飯男爵太鼓創作会としてお声掛け頂き、派遣に参加しました。その中で、私なりに、目標と考えていたことが二つありました。一つは、七飯高校有志 8 名がコンコードで行う和太鼓演奏を成功させること。二つ目は、コンコード夕暮れ太鼓さんにお会いし、今後の交流の土台を築くことでした。一つ目について、これは本当に短期間の取り組みで、生徒さんは不安で一杯だったと思いますが、計 4 回のCCHSでの演奏は大きな拍手と声援に包まれました。いつも西洋楽器に触れている生徒さんが、国際交流という文脈で和楽器に取り組んだことの意味は、大きなものだったのではないのでしょうか。今回の訪問では、七飯高校とCCHSブラスバンドによる合同演奏会も行われ、そこでの素晴らしい絆は、同じ楽器や同じ曲を通じて一つになれることを教えてくれたように思いますが、有志が取り組んだ和楽器への取り組みは、自分自身の文化を背負い、伝えるという点で、交流において、また違う大き



夕暮れ太鼓さんクラス風景♪
(後方男の子はヘッドフォン装)

な意味を持っていたと感じます。

目標の二つ目について。コンコードには男爵太鼓との縁で生まれた和太鼓の活動があります。この活動は、CCHSで行われているコミュニティークラスの一つでもあり、町の方々も参加する週一回の活動です。この日の練習場所は心地よい晴天の野外でした。日本の伝統楽器を楽しんで下さっている方々の笑顔や真剣な眼差しに胸が一杯になりました（耳栓やヘッドフォンをつけて練習する姿は新鮮で、合理的な所を感じました笑）。七飯の太鼓との合同曲の提案に対しては、是非やりたいと楽譜を受け取ってくださったため、実を結ぶよう進めたいです。

問題を「問う」環境 滞在中特に印象的だったものに、CCHS図書館で開催中だったフェアがありました。行われていたのは発行禁止本の展示。展示本にはライブラリアンの一言も付いていました。暴力や宗教、人種差別、死、セクシュアルな題材…日本の高校でこうした書籍を並べ、さあどうぞと生徒に委ねられるかを考えると、そう簡単ではないように思います。職員の方は、発行禁止ということはそれだけその本の存在意味が大きく、問うべき問題が含まれているということ。だからそれらをして問題提起を行うことは、壁は多くても重要なことだと話してくださいました。センシティブな話題を大人が隠すのではなく、むしろ明るみに出し、問う。こうした環境の中、受け手としての学生側は、「守られている」というよりは、自分の感覚や意見を常に試されて育っていると感じました。授業見学も行いましたが、先生が質問を言い終わる前から積極的な発言や挙手。ブラスバンドの合同演奏後の感想発表会でも、CCHSの学生さん達のアウトプットは滑らか。常に自分の意見を考えさせられるような環境と文化が埋め込まれていることを色々なシーンに感じました。



全体を通して～「交流」という繋がりの意味
～ この派遣への参加が決まってから、「交流」というこの不思議な繋がりの意味を考えていました。これに対して2つ私なりに感じたことです…。滞在中、中高生から良くきいた言葉は、「意外と伝わる！」という喜びと自信の声。私の職場は外国の方が多く、英語を求められますが、むしろ無力感を感じる日々。容赦なく伝わらない毎日です。これを思うと、



今回伝わる経験ができたのは、自分に意外と英語力があつたということではなく、交流という枠の中で、皆さんが私たちの言葉に心を傾け、理解しようと向き合ってくれた為なのだと思ひます。伝わり、分かり合えること、そこには必ず相手の努力や優しさがあることを、「交流」は教えてくれるのだと思ひました。

また、コンコードで同い年の子が今の目標を教えてくれました。人を守るため、海兵隊になることでした。海兵隊は先頭に立って攻撃を行う最も重要な役。私は、何か揺すぶられたような気持ちを抱いて帰ってきました。それまで、笑いあい語りあい、同じ部分や違う部分を発見しながら、コンコードの方々と「わかりあっていく」実感を積んでいました。しかし、仕事とは違って肩書きなしに出会い、ありのまま触れ合い、笑顔を交し合った分、「交流」を通して築かれる繋がりは幸せなまま終わるばかりでなく、動き続ける世界（情勢）の中で、やるせなく苦しい想いも突きつけることを知りました。そしてこの苦しさこそ、交流において大切なものなのかもしれないとも。その国に一人、知っている人がいることで、遠いその場所は、その人の顔になります。新聞やニュースで、その場所を聞く度に、心の中でその方々が泣いたり笑ったりするようになります。日本で震災が起きた時、すぐに手紙での言葉や応援、支援を下さったコンコードの方々の想いが、きっとそうであったように…。こうした経験や繋がりで、世界そのものが変わるかどうか私には分かりませ



Ground Zero より移されたモニュメント
人々が追悼のために訪れる (NY)

せん。ただ。一人一人の心に映る“世界”は、確かに変わるといえます。「交流」という、最初どこか浮いて見えたこの関わりの中にこそある、大切なもの。この枠の中でしか出来ないこと。それは、自分が思う以上に真に迫ったものであるのかもしれない。歓迎会でのデイビットさんの言葉が蘇ります…「遊んでいるように見えて、これは小さな国際外交。このことが、平和を築いていくんです」と。

感謝を忘れず、これから先、この経験と共に生きていきたいです。そして七飯とコンコードの方々の絆が長く受け継がれ、深いものになるよう、自分に出来る形で貢献していきたいと思ひます。本当に有難うございました。